

平成 19 年

12月

No. 530



広報

いいいたて

<http://www.vill.iitate.fukushima.jp>

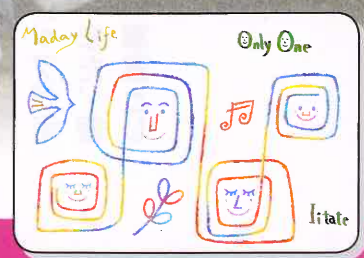


増田明美さんと早朝ジョギング

—第3回日本再発見塾in飯館—

11/4

「日本再発見塾」参加者や村民合わせて約 150 人が、同塾の講師でスポーツジャーナリストの増田明美さんと一緒に、スポーツ公園での早朝ジョギングを楽しみました。(関連記事 2～7 ページ)



大いなる田舎 まていうライフ・いいいたて



参加講師・
呼びかけ人

(順不同・敬称略)

高橋 世織
国文学者(文芸評論家)

塩野 米松
作家

佐川 旭
建築家

上野 誠
万葉学者。奈良大学文学部教授

呼びかけ人代表
黛 まどか
俳人。飯館村「愛の俳句」選者



山村レイコ
エッセイスト。国際ラリースト



増田 明美
スポーツジャーナリスト



藤原 誠太
養蜂家。日本在来種みつばちの会会長



蜂谷 宗苴
志野流香道 家元後嗣



富澤 貞身
ホテルメトロポリタン「花むさし」料理長



野崎 洋光
料理人。南麻布「分とく山」料理長

「第3回日本再発見塾 in 飯館」
参加講師・呼びかけ人／地元達人

地元達人

(順不同・敬称略)



赤石沢 式彦
(大久保・外内)
大雷神社元総代



多田 宏
(宮内)
大雷神社宮司



永沢 清
(飯櫃町)
ミニわらじ創作



高野チヨ子
(前田・八和木)
農業



佐藤 文良
(上飯櫃)
大工



▲第一部で昔の生活を話す佐藤さん、高野さん、永沢さん、多田さん



菅野 一郎
(前田)
前田炭部会



花井 正志
(前田)
前田炭部会



齋藤 政行
(前田)
前田行政区長



只野 俊
(前田・八和木)
林業家

ていねいに生きてみる、2日間



11/3~4 日本を学び、日本に遊ぶ

第3回 日本再発見塾 in 飯館

飯館村で「第3回日本再発見塾」が開催され、村内外から参加した約180人が農村生活や食文化、職人の業、伝統芸能などの「まじい」な暮らしに触れ、その中にある魅力を再考しました。

日本再発見塾とは？

各分野で活躍しているトップランナーが参加講師として各地に出向き、地元の人や参加者とともに、その地域の生活や仕事、現代社会が抱えている問題などについて考え、語り合う全国的なイベントです。塾の趣旨に賛同する呼びかけ人(黛まどか代表)らによる運営委員会、東京事務局、開催地の実行委員会、学生の有志たちが連携し開催しています。第1回の岩手県葛巻町、第2回の滋賀県高島市に続き、今回は村・東京合わせて190人のスタッフがボランティアとしてイベントの運営を支え、また、飯櫃4行政区が5次総の「つながりプラン」事業として、塾の準備・参加に関わりました。

主催：「第3回日本再発見塾」実行委員会
(東京事務局、地元実行委員会、学生実行委員会)
後援：福島県、飯館村、アミタ(株)、構想日本、東京財団
協賛：アサヒビール(株)、(株)空、(株)大伸社、東日本旅客鉄道(株)、(株)バイク
協力：アディダスジャパン(株)/gooo (NTTレゾナント)
※この事業は、「福島県電源地域振興・原子力等立地地域振興支援事業」の助成を受けて実施しました。

開講式

菅野村長が歓迎の言葉を述べたのに続き、地元実行委員会の佐藤宣征会長と学生実行委員会の田中俊委員長（慶應大）があいさつ。続いて、呼びかけ人代表の郷まどかさんが「この飯館村で、まぐいとは何かを発見し、暮らしを見つめ直す2日間にしましょう」とあいさつしました。



▲開講式の様子

給食

参加者が自ら配膳し、いただきました。



▲村給食センターによる地産地消にこだわった給食メニュー



村実行委員会長の佐藤宣征さん



司会を務めた佐藤弘子村実行委員



学生実行委員長の田中俊さん

何もなかった日本=今より豊かな日本？！

第一部「いちばん館」



▲地元達人の4人と司会の塩野さん

参加講師の塩野米松さんが司会を務め、地元達人の佐藤さん、高野さん、永沢さんの3人が何もない日本時代の知恵や工夫にあふれた生活を話し、多田さんが解説しました。

佐藤・大工は典型的な徒弟制で、親方の仕事を見よう見真似で体得していた。現金収入がなく、生活そのものを支えてもらう修行生活が3年位続いた。

塩野・昔は切り出した木材を山から下ろすまで非常に時間がかかった。その間に自然と木が乾燥して素性が現れてくる。だから昔の大工は木のクセを見極め、それぞれ家のどの部位に使うかという「適材適所」をやっていた。

高野・昔は甚平わらじを履いたり、綿羊の毛で編んだ服を着たりしていた。ものを着る発想がなかった。現金を使うようになったのは昭和30年代に入ってからで、初めてセーターを買ったのもその頃だったように思う。

永沢・今では「ゆい」の活動が少なくなりました。昔は結婚式などの時、引き出物（おつつみ）の楽屋や練り物も「ゆい」で専用の木型を使い夜通しで作っていた。

塩野・「ゆい」は、昔はこの田舎にもあった。近隣数軒のグループのようなもので、農作業や萱葺き屋根の葺き替えだけではなく、互いの生活面でも支援し合う共同体として機能していた。

塩野・昔の日本は、この仕事一筋というよりも四季折々にできることを何でも暮らしにつなげていくのが一般的で、現金収入の必要がなかった。高度成長に伴って現金の経済に取り込まれ、人々は都会へ出稼ぎに行き、そして都会の生活を村に持ち帰る。それらによって、それまでの「まぐい」な暮らしのペースが各地から消えていった。今回の日本再発見塾では、現代のスピード感や便利さと引き換えに失くしてしまったものへ思いを馳せる2日間にした。

テーマ別に3班に分かれて移動し、村の生活文化を学びました。

第二部・フィールドワーク

①里の文化・言葉【大雷神社（大久保・外内）】

赤坂神楽団の獅子神楽を見学した後、地元達人の永沢さんと高野さん、元総代長の赤石沢さんが、講師の郷さん、高橋さんと村の文化について語り合いました。



▲赤坂神楽団による獅子神楽の披露

②住まいの文化・山と共に生きる【只野俊さん宅（前田・八和木）】

築80年以上の只野さん宅で、地元達人の只野さんと佐藤さんが、講師の佐川さん、藤原さんと日本家屋古来の造りや知恵を解説しました。



▲日本家屋の造りについて話す佐川さん

③村の暮らし・まぐいな手仕事【前田直売所（前田）】

地元達人の齋藤さんと花井さん、菅野さんが、直売所建設の経緯や炭作りについて説明した後、参加者が講師の塩野さん、山村さんと俵編みなどを体験しました。



▲直売所などについて説明する齋藤さん



▲俵編みを体験する参加者



▲軒下を貫く一本柱を見上げる参加者



▲大雷神社について説明する赤石沢さん

100年前の料理は平成のご馳走

第三部「いちばん館」



▲野崎さんと一緒に調理する住民



▲講話する野崎さんと富澤さん

講師の野崎さんと富澤さんが、郷土料理にはその土地で生き延びるための工夫が詰まっていることを、「食の歳時記」に沿って説明しました。

また、この日の夕食は、飯櫃4行政区の住民をはじめ、食を考える会の皆さんたちが、野崎さん、富澤さんと一緒に村の郷土料理を調理しました。

凍み大根や凍み餅、凍み豆腐は凶作への備えであり、1年分以上用意していた。乾物は保存食であると同時に、美味しいダシを取るのを目的にしていた。そもそもダシは素材の味を引き立てるものなのに、ダシ自体が主張し始め、日本人の舌がすっかり慣らされてしまった。素材が美味しければ旨みが出るのだから、本来調味料は不要。

野崎・お節料理にはコブ（喜ぶ）、数の子（子孫繁栄）、橙（代々家系繁栄）など、全てプラスの意味が込められている。4日目に大根飯を食べるのは、大根に含まれるジアスターゼがご馳走続きの胃に優しく作用する合理的な理由に基づく。（7日目の七草粥も同じ理由）

夕食会

会場内のテーブルには、村民が野崎さんや富澤さんと一緒に作り上げた料理が並べられ、参加者らは講師の皆さんや村民たちと交流しながら村の郷土料理を味わっていました。



▲夕食会のようす



交流会

参加者と講師が第二部の3グループに分かれ、この日見て・歩いて・体験して・食べて・学び感じとったことを発表したり、「までい」な生活について意見を交わしました。



▲交流会のようす

民泊

今回の日本再発見塾では、村外参加者100人が飯桶4行政区や伊丹沢、小宮など6行政区33戸に分かれて民泊。それぞれの家庭で村の暮らしぶりを体験しました。



▲民泊受入れ家族と交流する参加者ら

【夕食メニュー】

ままだんご汁、すいとん、どじょう汁、いのしし鍋
猪ノ花ご飯、白おこわ、ねりけえ（そばがき）
煮物、花豆の煮物、ふきのうま煮、あぶらみそ、にんじんときのこの白和え、イータテベイクのみそいびり
キュウリのどぶ漬け、キムチ、みそ漬け
あずきかぼちゃ、キュウリの甘露煮、凍み餅
野草茶、黒豆茶、しそジュース、どぶろく



▲手踊りを披露する外内手踊り保存会

翌日の早朝、塾の参加者と村民合わせて150人が、講師の増田明美さんと一緒にジョギングを楽しみました。

ジョギングのコースは、陸上競技場から野球場周辺を通る約2km。参加者たちは冷たく澄んだ空気の中、増田さんと一緒に約15分かけて走りました。

ジョギング後には、増田さんが子どもたちを対象に、速く走るための練習方法などを指導しました。



▲増田さんの指導で準備運動



▲増田さんとジョギングをする参加者ら

間香（民家園）

講師の蜂谷宗苾さん指導の下、参加25人が間香を体験しました。香道では、香りを「嗅ぐ」ことを「聞く」ということで、香木などの香りを楽しみます。



▲間香実技のようす

歌・句で始める新コミュニケーション

第四部「歌垣」復興【きんり】

歌垣とは、男女が求愛の歌を掛け合う「歌掛け」のこと。「愛の句碑のある飯館村で万葉時代の歌垣を復興してみよう」と実施しました。今回の歌垣では、あらかじめ提示された問歌・問句に対して参加者が答歌・答句し、黛さんと上野さんが入選歌・句を選びました。ベストカップル賞に選ばれた2作品は、歌碑・句碑として「あいの沢」に設置されます。



▲盛り上がった「歌垣」入選作品の発表

《ベストカップル賞》

問歌・うみねこの荒磯の岩を登るとき 飛べないふたり海を見てゐる
答歌・白き波 荒磯の岩に 砕け散る 二人で見たい 波の行方を
問句・飯館に溢れる愛や 星月夜
答句・逢ひたくて ただそれだけや 星月夜

《入選歌・句》

問歌・わが村の 自慢の種は 住む人のまでい心と あいの句碑みち（菅野村長）
答歌・飯館は ゆつたりまつたり 雲流れ 愛の人垣母のぬくもり
問歌・いたての 山の紅葉の色 深く 心は染まる 君を思えば（上野誠講師）
答歌・ゆつくりと 愛の心も 染まりゆく 色付く秋の 飯館村に
問句・かの人の 足音近づく 萩の風（坂東三津五郎）
答句・白萩の 白き心に 定まりぬ
問句・降りみ降らず 星の合ふ 夜なりけり（黛まどか講師）
答句・逢ひたくて 千里馳せ来し 星今宵

昔行われていた「歌垣」を復興し、日本語の豊かさや深さを再発見しました。



▲琴を演奏して「歌垣」の雰囲気盛り上げた 榎戸二幸さん



▲この日の昼食は飯館牛ローストビーフなどが入った特製弁当

第五部・閉講式【きんり】

初日第二部の3班が、それぞれ体験したことや交流会で話し合ったことを報告した後、参加者全員が2日間を振り返り、「までい」な生活やこれからの日本文化について意見を交わしました。さらに、参加講師が感想を、地元達人と実行委員会の皆さんがお礼のあいさつを述べました。



▲感想を述べる参加講師の皆さん



▲グループ発表のようす

「第3回日本再発見塾 in 飯館」では、丁寧に一生懸命生きる村の「までい」な生活を、講師と参加者が体験しました。スタッフや参加者として関わった村民にとっても、自分たちの生活を見つめ直す、そして新たな気づきがたくさんあった、まさに「再発見」の2日間だったのではないのでしょうか。

